

## 焦らず、そして着実に！

立春に向かい、梅花、一輪、一輪と暖かさを届けてくれるようになりました。平素は、聖母の小さな学校の教育に、ご協力、ご支援をいただき深く感謝いたしております。

本校もコロナ感染拡大の中、検温、消毒はもとより、生徒の健康チェック等、一般校の対策マニュアルに沿って教育活動をしております。幸い、少人数ですので、休校することなくほぼ通常の活動をしております。

今のコロナ禍の中で最も被害を受けるのは、生活困窮者や不安定な被雇用者、若者など、社会の中に埋もれている部分、また、子どもたち、その中でも不登校の子どもたちも社会に漂う閉塞感にさいなまれ、益々身動きの取れない状態になっているように見えます。

「本人が行く気にならなければ、どうにもならない」と親は言います。学校も、「来てくれなければ関わりようがない」「家庭訪問しても会えない。今はそっとしておいた方がいいかもしれない」と言います。子どもは「どこから見ても、悪いのは自分だ」「自分でなんとかしなければ」と思って、身動きが取れず、混乱と暗闇の中に入ります。大人の社会に定着した「自己責任」的考え方が、更に子どもの意思や思考の育ちを委縮させているのでしょうか。そういう状態にある子どもに私たち大人はどう向き合えばいいのでしょうか。

「向き合う」以前の事として、子どもたちを一人にせず、必ず傍らに大人が「いる」。まず、傍らに「いる」。子どもと共に「いる」。時間的に空間的に行動的に「いる」、ということです。子どもが不登校から脱却できるように何かをする、というのではなく、普通に「いる」ということです。保護者会などで、「家の中で子どもといるのが耐えられない。イライラしてくる。また、そういう自分もいやで、辛くなる、子どもにとって自分はいない方がいいのではないか、耐えられない」、また、「一生自分はこの子に支配されていくのではないか、特に暴力を振るわれていた時は、逃げ場がなくて、殺されるかもしれない」と思ったり、「子どもと一緒に死のうと思ったりした」と、傍らにいる事の辛さや、どうすることもできない今の状況をどう受け止めて良いか分からない混乱した様子を素直に話されます。子どもとのつながりを回復（というより、深めると言った方がいいかもしれません）することの努力というか、真剣な姿勢が見えます。ここまで到達するのも、なかなかです。応援したいと思います。そして、そういう時に、息を抜き、「じっと自分を振り返ってみる」ことも大切です。「自分をじっと見つめる」事は、愛情を持って子どもを「じっと見つめる」まなざしを持つことだからです。そして、「じっと見つめる」まなざしの中には、必ず「希望」があります。不登校は、子ども自身を成長させますが、私たち大人を、また、社会を変えます。

今月も、小さな変化に希望を見出しながら教育にあたりたいと思います。よろしくお願いたします。

### <今月の主な行事>

- |                      |                    |
|----------------------|--------------------|
| 1日(火)・15(火) 数学(宮川先生) | 18日(金) ギター教室(北浦先生) |
| 9日(水) 体育(渡邊先生)       | 月例保護者会 19:00~      |
| 10日(木) 校外学習「古代エジプト展」 | 24日(木) 調理実習        |
| 16日(水) 華道教室          |                    |